

## 格助詞「で」の意味特性に関する一考察

菅 井 三 実

### 0. はじめに

本稿の目的は、現代日本語の格助詞「で」に認められる多様な意味機能を包括的に考察し、意味的・機能的な観点から「デ格」の示差的な特性を明らかにするとともに、個別の意味役割を具体的に特徴づけることにある。第1節では、まず「デ格」に関する基本的な問題を概観した上で、単一の意味特性として《主格または対格に対する背景的側面の提示》を導出し、第2節で同じ原理が空間次元にも保持されることを例証する。第3節で、他の格との弁別的な特性を明らかにし、最後の第4節で個別の意味役割について考察を加える。

### 1. デ格をめぐる基本的な問題点

この第1節では、まず「デ格」の意味的な多様性を概観し、その問題点を明らかにする。

一般に、格助詞「で」の意味記述には[道具][原因][場所][時間][材料][様態]のようなラベルが用いられ、それぞれ次のように例示される。

- |        |                                     |      |
|--------|-------------------------------------|------|
| (1)(a) | 太郎が新幹線で福岡へ出張した。                     | [道具] |
| (b)    | 花子が <u>ミス</u> の連続で演奏会を目茶苦茶にした。      | [原因] |
| (c)    | <u>ハワイの教会</u> で太郎が花子に指輪をはめた。        | [場所] |
| (d)    | <u>この数年</u> で携帯電話の普及率は劇的に増加した。      | [時間] |
| (e)    | この工場では <u>輸入オレンジ</u> で缶ジュースが作られている。 | [材料] |
| (f)    | 1台の車が <u>猛スピード</u> で走り去った。          | [様態] |

この中の用語法に若干のコメントを付け加えるなら、(a)における下線部の「新幹線」は厳密には[手段]と言うべきところであるかもしれないが、本稿では[道具]という用語を[手段]を含めたカバータームとして用いることとし、以下においても一貫して[道具]と呼ぶことにする。同様に、(b)における[原因]という用語も[理由]を含めたカバータームとして用いることにする。

さて、本稿が理論的に立脚する認知言語学では、基本テーゼとして、Bolinger (1977)の

《意味と形式の一対一対応の原則》が最大限に尊重され、1つの形式には出来る限り単一の意味を求める努力が払われる。これにより、格助詞「で」のように純粋な機能語についても、原則として単一のコアの意味が抽出され、皮相的に複数の意味が観察されても何らかの動機づけによって解決できることが期待される<sup>[1]</sup>。

では、実際「デ格」の場合どのような方法で処理され得るであろうか。国広(1982:108)や仁田(1995:20-21)は「デ格」に複数の意味用法が観察されることについて、格成分全体の解釈には名詞の語彙的な意味が大きく影響するとの分析を示している。具体的な例を挙げれば、次の(2)が示すように、他の文成分を全く同一にすると、名詞の語彙的性格と意味役割との間には一定の相関関係があるようにも見受けられる。

- |        |                             |      |
|--------|-----------------------------|------|
| (2)(a) | 太郎は <u>台所</u> でジュースを作った。    | [場所] |
| (b)    | 太郎は <u>3分</u> でジュースを作った。    | [時間] |
| (c)    | 太郎は <u>ミキサー</u> でジュースを作った。  | [道具] |
| (d)    | 太郎は <u>バナナ</u> でジュースを作った。   | [材料] |
| (e)    | 太郎は <u>学校の宿題</u> でジュースを作った。 | [理由] |

もしも名詞と意味役割の間に一定の相関関係が確立しているのであれば、下線部の「NPデ」が(a)のように[場所]と解釈されるのは名詞「台所」が《トコロ》を表す名詞だからであり、(b)のように[時間]と解釈されるのは名詞「3分」が《トキ》を表す名詞であるためと説明されるであろう。同様に、(c)や(d)のように、それぞれ[道具]や[材料]と解釈されるのはNPが具体的な《モノ》を表すときであり、(e)のように[原因]になるのは名詞「宿題」が《コト》を表すときと言うことができるかもしれない。この考え方が成り立つなら、個別の意味役割は名詞の語彙的な性格に帰着させることができ、問題は解決に向かうようにも思われる。

しかし、その一方で、名詞句が全く同じであっても他の格成分や述語によって異なる意味解釈が与えられることもある。

- |        |                             |      |
|--------|-----------------------------|------|
| (3)(a) | <u>木の枝</u> で地面に小さな穴を掘って下さい。 | [道具] |
| (b)    | <u>木の枝</u> で即席の白旗を作った。      | [材料] |
| (c)    | <u>木の枝</u> で指に怪我をした。        | [原因] |

この例では「デ格」が同一の名詞であるにもかかわらず、3つとも異なる解釈が与えられ、(a)では[道具]として解釈されるし、(b)では[材料]というのが適当であり、また、(c)は[原因]と解釈されるべきであろう。したがって「デ格」の個別的な意味用法を差別化するのに、名詞句や述語の性質も決定的な要因にはなり得ないということになる。

それでは、より本質的な解決策として、どのようなアプローチがあり得るだろうか。ここで一般言語学の知見を援用すれば、具格に固有の特性である《主格や対格に対して背景的側面を提示する》という性質を日本語の「デ格」に適應するという方法が考えられる<sup>[2]</sup>。具体的に、具格(デ格)が主格の背景を提示するという分析は、次のように例証される。

- (4)(a) 太郎がナイフで花子を殺した。 [道具]  
 (b) 今日は風邪で花子が学校を休んだ。 [原因]

これらの例において「デ格」は、寺村(1982:179-185)が言うように、決して必須の成分でないが、それにもかかわらず、実現される限り主格成分と結び付けることなしには適切に解釈し得ない。すなわち、(a)において下線部の「ナイフ」は「次郎を殺した」という出来事の中で主格の「太郎」から独立して機能することはできず、必ず主格の「太郎」との関連において補助的な側面を提示するという形で解釈されなければならない。同様に、(b)でも下線部の「風邪」が対格の「学校」に影響を与えるという解釈は成り立たないので、主格の「花子」に影響を与えるという関係を想定しなければならない。

また「デ格」は「ガ格」に対して背景的側面を提示するだけでなく「ヲ格」に対しても同様に背景的側面を提示し得る。

- (5)(a) 花子が毛糸で手袋を編んだ。 [材料]  
 (b) 太郎が代金をドルで支払った。 [様態]

すなわち、(a)における下線部の「毛糸」は、たしかに[道具]として主格成分と結び付けられないこともないが、[材料]として解釈される限りにおいては不可避的に対格の「手袋」と結び付けて解釈されなければならない。というのも、[材料]としての「毛糸」は究極的に産物としての「手袋」に収斂されるからである。同様に、(b)の「ドル」も、[様態]として解釈される限りにおいて対格の「代金」と結び付けられなければならない。ここでも「ドル」は「代金」にほかならないからである。

ここで注意すべきものがあるとすれば、しばしば特例的に扱われ、城田(1993:79)が「間接主体表示」と呼んだ例であろう。この用法については次の例文が示すように「デ格」が「ガ格」の代わりに動作の<主体>を間接的に示していると記述されるからである。

- (6)(a) 警察で(ガ)調べたところ嘘だと分かった。  
 (b) 私どもで(ガ)責任もって処理いたします。  
 (c) 兄弟で(ガ)殴り合った。

これらの「テ格」は、単に付加的に場所的領域を提示したものと異なり、本来「ガ格」が占めべき文法的位置を「テ格」が奪い取っているという点で、実質的に「テ格」が必須成分として実現していると分析される。しかしながら「ガ格」と「テ格」が交替しているという分析は正しくない。というのも、次の例が示すように、別の成分を「ガ格」で実現させることが可能だからである。

- (7)(a) 警察で捜査員が調べたところ嘘だと分かった。
- (b) 私どもで担当者が責任もって処理いたします。
- (c) 太郎と次郎が兄弟で殴り合った。

このように「ガ格」成分を明示的に具現することができるという点で、決して「で」が「が」と交替しているとは認められず、主格の背景的側面を提示しているという点で、通常の「テ格」と基本的に変わらないのである<sup>[3]</sup>。

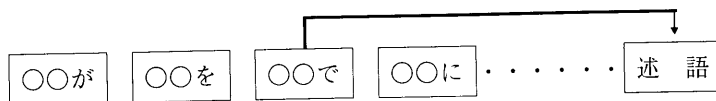
最後に「テ格」名詞句が背景的側面を提示することを支持する理論的な傍証を1つだけ挙げておきたい。すでに Langacker (1982)が明確に議論したように、受動化の生成原理は“主格NPと斜格NPとの間で反転が起こる”ものとして分析されるが、日本語の場合、主格NPへの昇格は対格目的語だけでなく与格目的語や属格目的語にも適用されるものの、具格目的語を主格へ昇格させることはできない。受動化においても具格成分が主格に昇格し得ないということは「テ格」で把握された成分が本来的に背景的なものとして解釈されていると考えることで自然に理解されることになるからである<sup>[4]</sup>。

以上、本節では「テ格」の意味機能が「ガ格」または「ヲ格」に対して背景的側面を提示することにある点を示した。

## 2. 空間次元のテ格

この第2節では、前節で示した《テ格の背景的特性》について、同様の原理が空間次元にも保持されることを例証する。

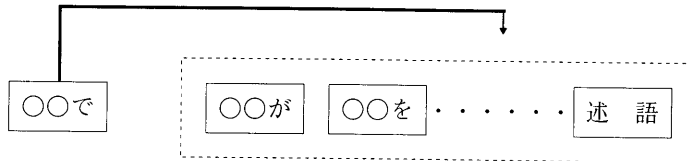
本節で特に《空間次元》を取り上げるのは、[場所]の「テ格」が機能的な面で他の意味役割と大きく異なる扱いを受けているからである。もう少し具体的に言えば、[道具]や[材料]について、城田(1993:78)は機能的に「用言を修飾する」と述べており、視覚的には次のように図示される。



【図1】

すなわち、[道具]や[材料]において「テ格」成分は矢印の向きが示すように単に用言とのみ修飾関係を結ぶというものである。

これと大きく異なる扱いを受けるのが[場所]や[時間]である。意味役割としての[場所]について、神尾(1980:61)や城田(1993:78)は「文全体を修飾する」と述べており、上の【図1】に倣えば次のように図示される。



【図2】

このように、場所的な「テ格」が節全体を包含するという考えは、先に挙げた(1)(c)のように「テ格」の「ハワイの教会」が現実的に「太郎が花子に指輪をはめた」という出来事全体を含むことから自然な一般化であるように思われるかもしれない。

そして、もし本当に空間的な[場所]が【図2】のように機能するのであれば、前節で述べた《主格または対格の背景提示》という本稿の分析は、[場所]の「テ格」に適用できないことになる。しかしながら、実際“空間次元の「テ格」が他の格成分を含む節全体を修飾する”という記述は必ずしも正しくない。言語事実を詳細に見ると、次の例が示すように、空間領域を最小限に狭めたとき[場所]の「テ格」に包含されない格成分も認められるからである。

- (8)(a) 花子がベランダで星を眺めていた。  
 (b) 花子が客席で役者の演技を満喫していた。

つまり、(a)において確実に下線部の「ベランダ」にいると解釈されるのは主格の「花子」に限られるのであって、対格の「星」は「ベランダ」にあるとは言い難い。同様に、(b)でも下線部の「客席」にいると言えるのは主格の「花子」だけであって、対格の「役者」は「客席」ではなく舞台にいると考えるべきであろう。かくて、場所的な「テ格」は必ずしも常に「ヲ格」を包含するとは言えず、これにより、少なくとも空間の「テ格」が節全体を修飾するという【図2】のような分析が誤りであることは明らかになる<sup>[5]</sup>。

また、次の例が示すように「二格」成分も場所的な「テ格」領域から外され得る。

- (9)(a) 池のほとりで祖父が錦鯉にそのエサをやっていた。  
 (b) 厚生省の前で市民団体のメンバーが厚生大臣に謝罪を訴えた。

すなわち、(a)において「池のほとり」にいるのは主格の「祖父」だけであって与格の「鯉」は「池のほとり」で泳ぐことはできない。同様に、(b)でも主格の「市民団体のメンバー」は確かに「厚生省の前」にいると解釈しなければならないが、与格の「厚生大臣」は建物の中にいるのが普通であって「厚生省の前」にいるとは解釈されない。よって、対格と同様に与格も場所の「テ格」領域から外され得るのであり、逆に言えば、確実に空間の「テ格」が包含すると言えるのは原理的に主格成分に限られることになる。

この特性は「ガ格」や「ヲ格」が主題化されても保持される。次の例は上の(9)(a)に対し主題化を施したものである。

- (10)(a) 池のほとりでは祖父が錦鯉にそのエサをやっていた。  
 (b) 池のほとりで祖父は錦鯉にそのエサをやっていた。  
 (c) 錦鯉には池のほとりで祖父がそのエサをやっていた。  
 (d) そのエサは池のほとりで祖父が錦鯉にやっていた。

これら(10)(a)～(d)では、それぞれ「池のほとり」「祖父が」「錦鯉に」「そのエサを」が主題化されているが、どの例文においても「池のほとり」に含まれ得る成分が主格の「祖父」に限られるという関係に変わりはない。

以上の考察に関連して念のために補足すれば、本稿は確実に場所の「テ格」に包含される要素が主格成分に限られると主張しているのであって、他の格成分が場所の「テ格」に包含される可能性を何ら否定するものではない。実際、第1節で挙げた(1)(c)の文には「ガ格」以外に与格の「花子に」と対格の「指輪を」という2つの文成分があり、その全てが空間的に「テ格」の「ハワイの教会」に包含されているのであるから、多くの場合に他の格成分も「テ格」に含まれると考えることには問題ないが、【図2】のように空間の「テ格」が初めから節全体を包含すると考えるのは厳に正されなくてはならないというのが本稿の論旨である。

さらに言えば、場所的な「テ格」の修飾対象が原理的に「ガ格」に収斂されるという特性は「態(voice)」が直接受動文に変換しても保持される。次のペアのうち、(a)の能動文において確実に「控室」にいると言えるのは主格の「太郎」であって、対格の「花子」が「控室」にいることは保証されない。

- (11)(a) 控室で太郎が花子を覗いたらしい。 [太郎が in 控室]  
 (b) 控室で花子が太郎に覗かれたらしい。 [花子が in 控室]

ところが、(b)のように「態(voice)」を直接受動文に変換すると、確実に「控室」にいてと言えるのは主格の「花子」であって、今度は与格の「太郎」が「控室」にいてことが保証されなくなる。すなわち、(a)でも(b)でも空間の「デ格」にいてと言えるのは常に主格であって、格において一定しているということになる。

このような特性は専ら「で」に固有のものであって、次のペアが示すように、奪格「から」では保持されない。

- (12) (a) 控室から太郎が花子を覗いたらしい。 [太郎が in 控室]  
 (b) 控室から花子が太郎に覗かれたらしい。 [太郎に in 控室]

この例のように場所NPが「から」で表示された場合は「で」の場合と事情が異なり、常に包含されると言える成分が格において一定することはない。(a)の能動文でも(b)の受動文でも「控室」にいて解釈されるのは「太郎」であるが、(a)では「ガ格」表示であり、(b)では「ニ格」表示である。つまり「カラ格」の場合は、本来的な修飾対象が主格に固定されることはなく、この点で「デ格」の場合と本質的に異なると言わなければならない。

ただし「デ格」の場合でも、例外的に間接受動文という有標の構造においては対格成分が優先的に「デ格」の修飾を受けることもあり、少なくとも次の(13)(a)において「デ格」の「公園」にいたと言えるのは対格の「子供」であり、むしろ主格の「花子」は現場を離れていたと考える方が自然かもしれない。

- (13) (a) 花子が公園で子供を誘拐された。 [子供を in 公園]  
 (b) 花子が公園で写真を撮られた。 [花子が in 公園]

しかし、間接受動文が常に対格成分を優先させるという強い制約もなく、同じ間接受動文でも(b)では主格の「花子」が「公園」にいなかったという解釈はできないので、全ての間接受動文において主格成分が「デ格」の領域から義務的に外されるわけではない点も併せて確認しておきたい<sup>[6]</sup>。

以上、本節では《空間のデ格》に検討を加え、(I)その修飾対象が原理的に用言全体というより単一の格成分に収斂されること、および、(II)被修飾的な格成分になるのは基本的に「ガ格」であるが「ヲ格」にも可能性があることの2点を示した。これにより、モノ次元においても空間次元においても「デ格」は“主格または対格の背景を提示する”という点で機能的に一貫していることが示された。

### 3. デ格の弁別的特徴

前節では機能的な観点から「デ格」における修飾関係の一貫性を検討したが、この第3節では意味的な観点から「デ格」の特徴づけを試みる。

本節で議論される「デ格」の意味的な特性について、結論を先取りしてしまえば、基本的に「デ格」は“動詞の語彙の意味によって変化を被らない”とあってよい。このことは、次の例が示すように「ガ格」と「ニ格」の関係が動詞の語彙的な意味によって変化を被り得ることと対照的である。

- (14) (a) 太郎が課長になった / 昇進した / 就任した。  
 (b) 隊員達が制服姿になった / 着替えた。

つまり、(a)における「ガ格」の「太郎」は動詞の意味が発動する前においては「課長」ではなく動詞の意味によって「課長」になるという点で、いわば<-課長>から<+課長>への変化が起こっていると言ってよい。同様に、(b)でも「隊員」に<-制服姿>から<+制服姿>への変化が起こるのは動詞「なる」や「着替える」の語彙的な意味によって起動されることになる。

これに対し「デ格」成分は前景的な「ガ格」成分との関係に変化が起きない。

- (15) (a) 太郎が課長で 終わった / 退職した / 出向した。  
 (b) 隊員達が制服姿で 現れた / 整列した / 出動した。

これらの「デ格」は城田(1993:78)が「述語転化補語」と呼んだものであるが、統語的な結合が適切である限りにおいて、(a)に見られる「太郎=課長」の関係は動詞の語彙的な意味にかかわらず不変であって、(b)でも「隊員達=制服姿」の関係が動詞によって変化することはない。

このとき確認しておかなければならないのは、本稿で「ガ格」と「デ格」の関係が変質しないというのは動詞の語彙の意味が両者の関係を変えないということであって、出来事の前後において変化が起こっても問題にはならないという点である。具体的に、上の(15)(a)に関して予想される反論を挙げれば、経験的に「太郎」が「退職」すれば<太郎=課長>の関係が消えるわけだからこの点で<太郎=課長>から<太郎≠課長>への変化があり、また「出向」する前には「課長」ではなかったかもしれないのだから<太郎≠課長>から<太郎=課長>への変化が起こっているのではないかというものであろう。しかし、そのような変化の可能性は「退職する」や「出向する」といった動詞の語彙的な意味が生じさせるわけではない。本稿で問題にしているのは、あくまでも動詞「退職する」や「出向する」が件の関係を変えるか否かにあ



るので、この点は記して強調しておきたい。

このように“動詞の語彙の意味によって変化を被らない”という特性は、次の例が示すように、変化動詞と「デ格」とが直接結び付かないという統語的な制約からも支持される。

- (16)(a) \*太郎が課長で なった / 昇進した / 就任した。  
 (b) \*隊員達が制服姿で なった / 着替えた。

つまり、動詞に広義の変化動詞を代入するとき補語を「デ格」で表示することができず、これにより「デ格」成分が変化の対象になり得ないことが間接的に示されていると思われる。

同様のことは「ヲ格」と「デ格」の間にも言える。

- (17)(a) 太郎が新車を80万で 買った / 売った。  
 (b) 花子が代金をドルで 支払った / 計算した。

このときも「ヲ格」と「デ格」の関係は不変であり、(a)においては<新車=80万>の関係が動詞の語彙の意味によって変化することはなく、(b)においても<代金=ドル>の関係に変化はない。

さらに、上述の分析は当然にして空間次元の「デ格」にも適用される。空間的な「デ格」については、多くの先行研究にない、本稿でも「ニ格」と対比させながら検討する<sup>[7]</sup>。本稿の立場としては、基本的に森田(1989)に従い、場所の「デ格」は行為の空間的限界を示すという分析を支持するが、本稿での議論に即して言い直せば“「ガ格」や「ヲ格」を空間的に限定し、しかも出入りを許さない”と特徴づけることができる。このことは、次の例から具体的に示されよう。

- (18)(a) 太郎が公園で 散歩する / 逃げ回る。 [太郎 in 公園]  
 (b) 太郎が公園で 生活する / 調査する。 [太郎 in 公園]

すなわち、(a)のように移動動詞を用いたときも(b)のように非移動動詞を用いたときも「ガ格」の「太郎」が「デ格」の「公園」にいるという関係は不変であり、如何なる状況を想定しても“太郎が公園に所在しない”ような解釈は決して成立しない。しかも、この含意は(a)でも(b)でも変わらないため、動詞の語彙の意味には依存しないと断言していい<sup>[8]</sup>。

このように、場所の「デ格」には確実に「ガ格」成分が存在することが保証されるのと対照的に、意味的な関係として「ガ格」成分が場所の「ニ格」に存在するかどうかは完全に動詞の語彙的な意味に依存する。

- (19) (a) 太郎が故郷に 滞在する / いる。  
 (b) 太郎が故郷に 帰省する / 行く。  
 (c) 太郎が故郷に 提言する / 思いを馳る。

これらの例のうち、(a)のように動詞が存在や滞在を表すときは文字通り「故郷にいる」ことが含意されるが、(b)のように動詞が移動を表すとき「太郎」は移動の結果「故郷」に到着したのであって、厳密に言えば「太郎」が「故郷」にいるのは動詞「帰省する」が表す事態の最終的な局面のみに過ぎない。また、(c)のように動詞が存在や移動以外の事象を表すときは必ずしも「故郷にいる」という含意を認めることはできなくなる。したがって、場所の「二格」には事象を通じて「ガ格」との包含関係が変わらないという性質はなく、この点で「デ格」と本質的に異なるということになるのである。

また、応用的な観点から言うと、本稿の分析が特に有効であろうと思われるのは特に次のようなペアに対してであり、皮相的には「デ格」と「二格」の対立が中和しているように見えるかも知れない。

- (20) (a) 道に倒れる。  
 (b) 道で倒れる。

このペアでも両者は知的意味において明確に異なり、(a)のように「道」が「二格」で表示されたときは「倒れる」という動作(行為)に伴う移動の到着点を指定しているのに対して、(b)のように「デ格」で表示したときは、全ての行為が「道」という場所において生じたことが反映される。このことは、次のように文脈を特定することによって一層はつきりする。

- (21) (a) バスの昇降口に立ったとき急に目眩がして道に倒れた。  
 (b) ? バスの昇降口に立ったとき急に目眩がして道で倒れた。

ここでは「倒れる」直前において主体が「バスの昇降口」にいたことが明示されており、動詞「倒れる」という動作によって「道」という別の場所に移動したと解釈するためには(a)のように「道」を「二格」で表示しなければならず、(b)のような「デ格」表示が不適格なのは「バスの昇降口」から「道」への移動が許されないことになるためと説明される<sup>[9]</sup>。

最後に《モノ》から《コト》へと抽象度が高くなっても「デ格」の特性が保持される点に言及したい。助詞「で」が《コト》の名詞を導いて意味的に[原因]を表すとき、次のペアから分かるように、[原因]が与えられて時間的な間隔を置かず何らかの影響を及ぼす場合であれば、山梨(1994 a)が言うように「デ格」と「二格」の両方が可能である。

- (22) (a) 母親があまりのショックで寝込んだ。  
 (b) 母親があまりのショックに寝込んだ。

この場合、[原因]となる「ショック」が直接「寝込む」という結果を引き起こしていると言ってよいが、次のように《原因》から《結果》までに時間的な間隔があり、しかも結果的な事態が暫く続くような場合には[原因]としての「二格」は容認度が低くなる。

- (23) (a) そのショックで母は翌日から1週間も布団から出られない状態が続いた。  
 (b) ? そのショックに母は翌日から1週間も布団から出られない状態が続いた。

このとき、(a)が自然に容認されるのは「母」と「そのショック」が機能的に密着しているため時間的な間隔があっても継続的に影響が及び得るからであると説明される。これに対して、(b)の容認度が低くなるのは「母」と「そのショック」が時間的に離れており、この間隔があることによって継続的な影響を与えることができないためと説明される。

以上、本節では、主要な格成分と「テ格」成分の関係が、動詞によって表される事象を通じて変質しないことを示し、この点で他の格と弁別的に特徴づけられることを見た。

#### 4. 意味役割の特徴づけ

これまでの各節では「テ格」全体を特徴づける機能的・意味的な特性を求めて来たが、この最後の第4節では個々の意味役割について考察を加える。

まず、意味役割としての[場所]については、意味的にも非常に透明であり、前景的な主格成分や対格成分を包含する空間的領域を示すものであるから、次の例が示すように、関数□を使って【テ格□ガ格】あるいは【テ格□ヲ格】と表示することができる。

- (24) (a) テラスで太郎が星を眺めていた。 [テラス□太郎が]  
 (b) 花子が駐車場で子供を誘拐された。 [駐車場□子供を]

すなわち、(a)においては主格の「太郎」が「テ格」の「テラス」によって空間的に包含されており、(b)においても対格の「子供」が「テ格」の「駐車場」によって空間的に包含される関係にあることは明らかである。

このように[場所]という意味役割を《包含》という観点から捉えるとき、次のような用例も、実は広い意味での[場所]と考えてよいことが分かる。

- (25) (a) 大蔵省では主計局が最も強力な権力を握っている。 [大蔵省→主計局]  
 (b) 作曲家ではバッハが一番好きだ。 [作曲家→バッハ]

これらの例からは、広義の《包含》関係には少なくとも2つの下位タイプがあることが伺える。1つは(a)における「大蔵省」と「主計局」のように<全体と部分>の関係であり、もう1つは(b)における「作曲家」と「バッハ」のように<種と類>の関係である。

次に、意味役割[道具]はどうだろうか。山梨(1994b:107-110)が言うように[道具]格はプロトタイプの条件の1つに<制御可能性>があり、より正確に言えば、次の例が示すように<制御可能性>は「デ格」に対する「ガ格」の制御を指すことが分かる。

- (26) (a) 早速、太郎が鉛筆でデッサンを描き始めた。 [太郎→鉛筆]  
 (b) 次郎が新車で九州へ帰省した。 [次郎→新車]

つまり、(a)のような他動詞文においても主格の「太郎」が「デ格」の「鉛筆」を[道具]として制御しており、(b)のような自動詞文においても主格の「次郎」が「デ格」の「新車」を制御するのであって、この方向は決して逆にならない。したがって、前景的な主格成分から「デ格」成分にエネルギーが伝達される関係は単方向的であり、関数→を使って図式的に【ガ格→デ格】と表記される<sup>[10]</sup>。

このような[道具]と対照的なのが[原因]であり、[道具]と逆向きのエネルギー伝達によって特徴づけられる。

- (27) (a) 成績不振で母親が子供を殴った。 [成績不振→母親]  
 (b) 窃盗容疑で太郎が警察に逮捕されたらしい。 [窃盗容疑→太郎]

すなわち、(a)においては背景的な「デ格」の「成績不振」から前景的な主格の「母親」に向けてエネルギーが伝達されると考えられるので、関数→を使えば【デ格→ガ格】と表記できる。同様に、(b)でも「ガ格」の「太郎」の逮捕には下線部の「デ格」が理由として関わっているという点で【デ格→ガ格】の関係として把握される。

次に、意味役割[様態]の場合は、前述のように「ガ格」や「ヲ格」が「デ格」と広義の同定関係にあり、図式的には関数=を使って【ガ格=デ格】あるいは【ヲ格=デ格】と表記することができる。

- (28) (a) 行方不明の男性が遺体で発見されました。 [男性=遺体]  
 (b) 太郎が新車を80万で買った。 [新車=80万]

つまり、(a)のように動詞が自動詞のとき「デ格」の「遺体」は主格の「男性」と広義の同定関係をなし、(b)のように動詞が他動詞のときは「デ格」の「80万」は対格の「新車」と広義の同定関係を結ぶことが観察される。

このように、[様態]の意味関係を【ガ格=デ格】ないし【ヲ格=デ格】と表記するとき、重要なことは、実は「ガ格」と「デ格」の指示対象が同一であって、上の(28)(a)で言えば「行方不明の男性」と「遺体」は当該の事象の中では同じ人物を指しており、したがって、発話プロセスの観点から言えば、同一の対象から「男性」という側面を取り上げながら同時に「遺体」という別の側面を取り上げているという点である。

このことが特に重要であると思われるのは、[材料]の格表示における「デ」と「カラ」の差異をも同様の原理によって分析することが出来ると期待されるからである。具体的に問題になるのは、山梨(1987b:33-34, 1995:55-56)が挙げているように、[材料]の格表示が「デ」でも「カラ」でも表示し得るといふ現象である。

- (29)(a) 丸太でカーヌーを作った。  
 (b) 丸太からカーヌーを作った。

当然のことながら、このペアでも知的意味において明確に異なる应考虑すべきである。すなわち、(a)のように材料を「デ格」で表示したときは、産物としての「カーヌー」の中に材料としての「丸太」が何らかの意味で残存しているというような意味合いが強く、乱暴な言い方をすれば「これはカーヌーだ」と言える同一の対象に対して同時に「これは丸太だ」とも言える状態にある。これに対して、(b)のように「カラ格」で表示したときは「カーヌー」と「丸太」を別の範疇として扱おうという意味合いが強くなる。このことは、次の例において一層はっきりする。

- (30)(a) 妹が毛糸でセーターを編んだ。  
 (b) ? 妹が毛糸からセーターを編んだ。

このペアで、[材料]の表示が「デ格」でなければならないのは「毛糸」を材料にして編んだ産物の「セーター」も物質的には所詮「毛糸」に過ぎず、この点で「セーター」は同時に「毛糸」でもあり得る状態として解釈されているためと説明される。

逆に、産物と材料が異なる範疇として扱われるとき、次のペアが端的に示すように、もはや「デ格」で表示することはできなくなる。

- (31) (a) ? 原油で石油を精製する。  
 (b) 原油から石油を精製する。

ここで(a)における原料の「原油」を通常「デ格」でマークできないのは、一般に「石油」が「原油」と別の物質として扱われるからこそ両者に異なる名称が与えられているからであって、上述の言い方をすれば「石油」が同時に「原油」であり得ないためと説明される。かくして、[様態]も[材料]も、同一の対象から異なる側面を取り上げるという観点から言えば、図式的に【ガ格＝デ格】ないし【ヲ格＝デ格】という関数によって表され、この点で、[材料]は[様態]のバリエーションと扱ってよいことになると思われる。

最後に、曖昧性と漠然性の問題について簡単に言及しておきたい。格の解釈というものが一定不変ではなく視点や文脈によって大きく揺れるという現象は、山梨(1994 a, 1995)や仁田(1995)らによって指摘・分析されているが、本稿の分析には「曖昧性(ambiguity)」ないし「漠然性(vagueness)」の予測に寄与し得るとの期待がある。具体的には、次の例において(a)は曖昧であるのに対し(b)は漠然的である。

- (32) (a) 大助は、その新しい薬で死んだのだ。  
 (b) 花子は、市内の図書館で文献を調べた。

つまり、(a)における「デ格」の「新しい薬」は[原因]と[道具]との間で曖昧であり、具体的には「死ぬ」という出来事が非意図的な事故であれば[原因]と解釈されるのに対して、意図的な行為であれば[道具]と解釈される。このとき、上で述べたように[原因]は主格と具格の間に【デ格→ガ格】の方向性があり、[道具]は【ガ格→デ格】という全く正反対の方向性があるため、[原因]と[道具]が漠然的になることはなく、可能性としては曖昧にしかならないとの予測が成立する<sup>[11]</sup>。これに対し、(b)における「デ格」の「図書館」は通常[場所]と解釈されるが、同時に[道具]としての解釈も多分に取り込まれるので、[場所]と[道具]の間で漠然的になり得る。この2つが漠然的になり得るのは上述のように[場所]は原理的に【デ格↔ガ格】のような包含関係にあり、[道具]は【ガ格→デ格】のような方向性をもつが、この2つの関係が必ずしも矛盾せず、十分に両立し得るからと考えてよい。つまり「ガ格」が「デ格」に包含されながら同時に「デ格」を利用するという関係が成立するためと説明されるのである<sup>[12]</sup>。

以上、本節では「デ格」の修飾対象が主要な格成分「ガ格」や「ヲ格」に収斂されることを前提として、背景的な「デ格」成分が前景的な格成分との間の相互関係によって特徴づけられるとの分析を提示した。

## 5. 結語

本稿は、現代日本語の「デ格」を包括的に分析し、意味的な観点から弁別的に特徴づけるための議論を行った。本文で検討した「デ格」の特性は次のように要約される：

- [i] 「デ格」は、統語的には述語と結び付く独立した格成分でありながら、その意味機能は前景的な「ガ格」ないし「ヲ格」の背景的側面を提示することであり、この点でモノ次元も空間次元も本質的に変わらない。
- [ii] 前景的な「ガ格」ないし「ヲ格」成分と背景的な「デ格」との意味関係は、動詞の語彙的な意味によって変質しない。
- [iii] [i]と[ii]の特質が「デ格」のゲシュタルトであるのに対し、個別の意味役割は前景的な主要格成分と背景的な「デ格」成分との間の関数的な相互関係によって特徴づけられる。

以上の点で「デ格」は他の格と示差的に区別されるため、これによって「デ格」は意味的に輪郭が明確にされたと思われる。ただ、紙幅の都合で触れることのできなかった時間次元などの問題については、別の機会に委ねたい。

## 注

- [1] この枠組みによる「ガ格」の分析に菅井(1993, 1995)がある。また Janda (1990:286)は、格が「言語固有 (language-specific)」であることを認めた上で、認知的には単一で統一的な範疇であると明確に述べている。
- [2] 一般言語学の立場から具格と与格とともに「周辺格 (Randkasus)」と特徴づけ、具格が主格や対格と対立関係にあるとの分析を与えたのは Jakobson (1936/1971)である。このような具格の背景的な特性については、Wierzbicka (1980)および Blake (1994)も参照されたい。また、日本語の「デ格」に《背景》という特徴づけを与える分析は、すでに木之下(1970:26)に見られるが、新井(1972:49)によって「背景」という概念の不明瞭さが問題にされていた。
- [3] さらに言えば、(a)や(b)において「デ格」成分は主格成分の母集合を提示しており、このことは、森田(1989)や城田(1993)が言うように、いわゆる「間接主体表示」的な「デ格」成分が複数概念になる傾向が強いことと符合するように思われる。また、仁田(1995)は、(c)のような例に対して「デ格」を<主体>と分析しているが、本稿の分析からその必要はないことになる。
- [4] 認知言語学的手法による受け身文の分析については、菅井(1994)を参照されたい。また、仁田(1994:5-6)が言うように「デ格」成分が分裂文の焦点になりにくいという事実も「デ格」が背景的であることを支持しているとみていいだろう。
- [5] 純粋に現実的な位置関係からのみ見れば「星」も「ベランダ」の上方にあると言えないこともないが、やはり「星がベランダで輝いている」のような表現は明らかに不自然である。認知文法のパラダイムから Vandeloise (1994)が英語の前置詞 in に関して論証したように、場所表現句で修飾することは空間的に包含するという単純な問題ではなく、機能的な制約と関わっていることが日本語の「で」にも言えるということであろう。

- [6] どのような構造的条件において「デ格」の前景項が決まるかについては詳細に検討しなければならないが、間接受動文は有標性の高い構文であり、一部の間接受動文で対格成分が通常の主格成分と同じような地位に立つ合理的な動機づけ(motivation)が認められれば、このような現象を特別に扱う必要がなくなる可能性も十分あると思われる。
- [7] 空間次元の「で」と「に」については多くの先行研究があり、主なものだけでも例えば、新井(1972)、久野(1973)、柴谷(1978)、山田(1981)、赤羽根(1987)、益岡(1987)、森田(1989)、中右(1995)、Makino(1968)、Jacobsen(1977)、Ueno(1995)がある。本稿の延長として空間の「デ格」と「ニ格」については、稿を改めて詳しく議論する予定である。
- [8] もちろん、極性が否定であれば事情は異なる。つまり「太郎は公園で遊ばなかった」のように否定モードにおいては「太郎は公園にいた」が含意されるとは限らない。
- [9] 本稿では紙幅の都合で[時間]について詳しく論じることはできないが、[場所]における「デ格」と同じ原理によって分析されるとの見通しをもっている。
- [10] ここでいう“抽象的なエネルギー伝達”という考えはTalmy(1985)の《Force Dynamics》に始まり、その後、Langacker(1991:283)の《Billiard-ball model》やCroft(1991)の《Causal Chain》として理論的に発展して行ったものである。
- [11] ただし、もし「ガ格」と「デ格」が相互に影響を与え合うような状況が起り得るならば、[原因]と[道具]の間で漠然的になる可能性もあるが、現在のところ確認されていない。
- [12] 山梨(1987a, 1994a)にも「デ格」における解釈の曖昧性ないし漠然性についての議論がある。また、認知言語学の枠組みで「曖昧性(ambiguity)」と「漠然性(vagueness)」について論じた研究としてTuggy(1993)も参照されたい。

### 参考文献

- 赤羽根義章 1987「格助詞『に』と『で』について——文法指導の視点から」『日本語学』第6巻・第5号(1987年5月号), pp. 82-94.
- 新井栄蔵 1972「場所を示す場合の格助詞『に』と『で』をめぐって」『日本語・日本文化』第3号, pp. 43-57. 大阪外国語大学研究留学生別科.
- 神尾昭雄 1980「『に』と『で』——日本語における空間的位置の表現」『言語』第9巻・第9号(1980年9月号), pp. 55-63.
- 木之下正雄 1970「格助詞」『文法』第2巻・第5号(1970年3月号), pp.18-26.
- 国広哲弥 1967『構造的意味論——日英両語対照研究』三省堂.  
1982『意味論の方法』大修館書店.
- 久野 暲 1973『日本文法研究』大修館書店.
- 柴谷方良 1978『日本語の分析』大修館書店.
- 城田 俊 1993「文法格と副詞格」仁田義雄(編)『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版, pp. 67-94.
- 菅井三実 1993「構文スキーマ理論序説」『人文科学研究・第22号』名古屋大学大学院文学研究科, 人文科学研究編集委員会, pp. 33-50.  
1994「日本語における直接受け身文と間接受け身文の統一的説明」『日本語・日本文化論集』第2号, pp. 23-42. 名古屋大学留学生センター.  
1995「助詞『ガ』の総記性に関する一考察」『名古屋大学文学部研究論集』121(文学41), pp. 181-197.
- 寺村秀夫 1982『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版.



- 中右 実 1995 「『に』と『で』の棲み分け——日英語の空間認識の型(1)」『英語青年』第140巻・第10号(1995年1月号), pp. 20-22.
- 仁田義雄 1994 「日本語の格を求めて」仁田義雄(編)『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版, pp. 1-37.
- 1995 「格のゆらぎ」『言語』第24巻・第11号(1995年11月号), pp. 20-27.
- 益岡隆志 1987 『命題の文法』くろしお出版.
- 森田良行 1989 『基礎日本語辞典』角川書店.
- ヤコブセン, W.M. 1989 「他動性とプロトタイプ論」久野暉・柴谷方良(編)『日本語学の新展開』くろしお出版. pp. 213-248.
- 山田 進 1981 「機能語の意味の比較」国廣哲彌(編)『日英語比較講座[3]意味と語彙』大修館書店, pp. 53-99.
- 山梨正明 1987a 「深層格の核と周辺——日本語の格助詞からの一考察——」『言語学の視界』大学書林. pp. 59-72.
- 1987b 「文脈と言語理解の諸相」『日本語学』第6巻・第5号(1987年5月号), pp. 26-36.
- 1993 「格の複合スキーマモデル」仁田義雄(編)『日本語の格をめぐる』くろしお出版, pp. 39-65.
- 1994a 「日常言語の認知格モデル[2]——格解釈のゆらぎ」『言語』第23巻・第2号(1994年2月号), pp. 100-105.
- 1994b 「日常言語の認知格モデル[4]——認知的視点の投影と言語理解」『言語』第23巻・第4号(1994年4月号), pp. 106-111.
- 1995 『認知文法論』ひつじ書房.
- Blake, B. J. 1994 *Case*. (Cambridge Textbooks in Linguistics). Cambridge : Cambridge University Press.
- Bolinger, D. 1977 *Form and Meaning*. London : Longman.
- Croft, W. 1991 *Syntactic Categories and Grammatical Relations : The Cognitive Organization of Information*. Chicago and London : The University of Chicago Press.
- Jacobsen, W. M. 1977 "Locatives and case marking in Japanese." *The CLS Book of Squibs Cumulative Index 1968-1977*. pp. 52-53. Chicago Linguistic Society.
- Jakobson, R. 1936 "Beitrag zur allgemeinen Kasuslehre : Gesamtbedeutungen der russischen Kasus." reprinted in R. Jakobson *Selected Writings II : words and language*. 1971, The Hague: Mouton., pp. 23-71.
- Janda, L. A. 1990 "The radial network of a grammatical category : its genesis and dynamic structure." *Cognitive Linguistics*, Vol. 1(3), pp. 269-288.
- 1993 *A Geography of Case Semantics : The Czech Dative and the Russian Instrumental (Cognitive Linguistics Research 4)*. Berlin : Mouton de Gruyter.
- Langacker, R. W. 1982a "Space Grammar, Analysability, and the English Passive." *Language*, Vol. 58, pp. 22-80.
- 1991 *Foundations of Cognitive Grammar*, Vol. 2. Stanford, CA. : Stanford University Press.
- Makino, Seiichi 1968 "Japanese 'Be'." In J. W. M. Verhaar (ed.) *The verb 'be' and its synonyms : philological and grammatical studies*, Part. 3. (Foundations of Language / Supplementary Series, Vol. 8), Dordrecht-Hoolland : D. Reidel Publishing Company,

- pp. 1-19.
- Talmy, L. 1985 "Force dynamics in language and thought." *CLS*, 23, Part 2, pp. 293-337.
- Tuggy, D. 1993 "Ambiguity, polysemy, and vagueness." *Cognitive Linguistics*, Vol. 4 (3) , pp. 273-290.
- Ueno, Seiji 1995 "Locative / Goal Phrases in Japanese and Conceptual Structure." *KLS*, 15, pp. 122-132. Kansai Linguistic Society.
- Vandeloise, C. 1994 "Methodology and analyses of the preposition *in*." *Cognitive Linguistics*, Vol. 5 (2), pp. 157-184.
- Wierzbicka, A. 1980 *The case for surface case* (linguistica extranea, studia 9). Ann Arbor : Karoma.